

■ PCN だより

PCN Volume 64, Number 6 の紹介 (その2)

先月号では、2010年12月発行のPCN Vol. 64, No. 6に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

Review Article

1. Apolipoprotein E and central nervous system disorders: Reviews of clinical findings

M. Takeda, R. Martinez, T. Kudo, T. Tanaka, M. Okochi, S. Tagami, T. Morihara, R. Hashimoto and R. Cabelos

アポリポ蛋白 E と中枢神経疾患：臨床知見のまとめ

認知症は、世界中で最大の健康問題である。現時点で世界に2500万人の患者がおり、この数は今後も増加し20年後には7500万人に達する。アルツハイマー病は認知症の最大の原因であり50~70%を占め、次いで血管性認知症(30~40%)、混合型認知症(15~20%)が多い。アルツハイマー病の発症病理は未解明であるが、遺伝要因と環境要因との相互作用により発症すると考えられている。家族性アルツハイマー病の原因としてアミロイド前駆体蛋白、プレセニン-1、プレセニン-2 遺伝子が同定されているが、アルツハイマー病の発症病理には150以上のリスク遺伝子の関与が想定されている。なかでもアポリポ蛋白 E 遺伝子は最大のリスク遺伝子であり、環境因子との相互作用によりアルツハイマー病における神経細胞の変性・脱落を惹起すると考えられている。そして、アポリポ蛋白 E は数多くの中枢神経疾患の発症にも関与している。アポリポ蛋白 E はコレステロール脂質代謝の鍵となるリポ蛋白であるだけでなく、多くの中枢神経疾患の発症病理に関与していることから、本論文では、アポリポ蛋白 E と各種疾

患との関係についてこれまでの報告をレビューした。

Short Communication

1. Utility and sufficiency of psychiatric inpatient units in general hospitals: A cross-sectional study in Tokyo

K. Hatta, H. Nakamura, C. Usui and H. Kurosawa

総合病院の精神病床の使用目的と充足性：東京都における横断研究

総合病院の精神病床の使用目的と充足性を調べるために、東京都内のすべての総合病院を対象に横断研究を実施した。その結果、入院理由は、急性期治療(43%)、身体合併症治療(15%)、修正型電気けいれん療法(13%)、鑑別診断のための精査(12%)、他(17%)であった。調査当日に総合病院の精神病床に相応の理由があるにもかかわらず入院できなかった患者数は、必ずしも総合病院の精神病床でなくてよい患者の入院数より多いと見積もられた。総合病院の精神病床は、総合病院ならではの期待される役割を果たしていること、およびすでに不足の状態に陥っていることが明らかになった。

2. Chronic repetitive transcranial magnetic stimulation failed to change dopamine synthesis rate: Preliminary L- $[\beta\text{-}^{11}\text{C}]\text{DOPA}$ positron emission tomography study in patients with depression

Y. Kuroda, N. Motohashi, H. Ito, S. Ito, A. Takano, H. Takahashi, T. Nishikawa and T. Suhara

慢性の反復性経頭蓋磁気刺激はドパミン合成を変化させなかった：うつ病患者におけるL- $[\beta\text{-}^{11}\text{C}]\text{DOPA}$ 陽電子断層法による予備的検討

われわれは、うつ病患者における中枢ドパミン機能に与える反復性経頭蓋磁気刺激 (rTMS) の影響について、内在性のドパミン合成を測定する放射性薬剤 L- $[\beta\text{-}^{11}\text{C}]\text{DOPA}$ を用いた陽電子断層法 (PET) により検討した。左の背外側前頭前野に対する1日1回10日間のrTMSを8名のうつ病患者に施行した。最初の刺激の前と最後の刺激の1日後に

PET 検査をそれぞれの患者に実施した。8名中4名がrTMSに反応したが、線条体のドパミン合成速度は変化を示さなかった。以上の結果は、慢性rTMSのドパミン系に与える影響が限定的であることを示唆している。

(精神神経学雑誌編集委員会)